

令和5年度 子ども図書研究室講演会

開催日：令和5年7月2日（日）

会場：静岡県立中央図書館

参加者：94名

令和5年度子ども図書研究室講演会では、福音館書店の寺久保末園氏を講師にお迎えし、「絵本づくりの過程で教わったこと」という演題でご講演頂いた。寺久保氏は月刊絵本「こどものとも」「こどものとも年中向き」の担当編集をされた後、書籍編集部にて『まゆとっぴ』『だるまちゃんとキジムナちゃん』『いきものづくし ものづくし』シリーズなどの作品編集をされている。加古里子さんや安野光雅さんなど著名な絵本作家の方々と仕事をしてこられた寺久保氏が絵本づくりで大切にしていること、その思いをお話頂いた。

月刊絵本「こどものとも」「こどものとも年中向き」は4～6歳向けの絵本であり、物語絵本に限らず、昔話や字のない絵本、写真絵本など、年間各12冊発行している。今まで刊行された中には、1963年発行の『ぐりとぐら』や『しょうぼうじどうしゃ じぶた』なども含まれる。動物、乗り物、虫などの様々な本に出逢って欲しい、普遍的に子どもたちに楽しんでもらえる本づくりをしたいという思いを持ち、「子どもに読んであげる本」「子どもたちの楽しみのためのもの」「大人が本気で作るもの」の3つの柱を軸に、ラインナップを考えている。

1980年、福音館書店の雑誌「子どもの館」に

『冬語り』というお話を書いたのが、富安陽子さんである。『冬語り』は、『まゆとっぴ』シリーズに登場する、やまんば母さんを主人公にしている。その後、富安さんの物語に降矢ななさんが絵を描いた『やまんば山のモッコたち』に発想を得て、絵本の「まゆシリーズ」は誕生する。編集者が、「子どもたちと友達になるような主人公の話を描いて欲しい」と依頼したことから、娘のまゆを主人公とした『まゆとおに』が刊行された。

絵本制作のプロセスでは、富安さんが書いた文章から、降矢さんが絵を描き、その絵を見てまた文章を変えるという作業を何度も行う。そのため1番最初に書いた文章を大幅に削ることもある。

『まゆとっぴ』の序盤、一番最初の文章では「そのこは みどりいろのかおでまゆのほうをみて おかしそうに ケケケと笑いました」となっていたが、「そのこは「ケケケッ」と わらいました。」と、絵を見ればわかるような部分は文章からそぎ落とした。反対に「おすもうのれんしゅうしてんだからな」という文章は、「おすもうチャンピオンの テッカマルを ぶんなげる れんしゅうだぞ」と何のために相撲の練習をしているのかわかるようにテキストが増えることもある。さらに仲間のかっぴたちが沼から顔を出すシーンでは、「ぬまからかっぴがでてきました」ととどめず、「でてくる でてくる。かっぴが でてくる。どんどん でてくる。うじゃうじゃ でてくる」と繰り返すほうが、文章を耳から聞いたときに状況がありありと浮かび、1枚の絵と文章が組み合わさって、面白さがより伝わるのではと考えた。文の方の力によって、また、絵描きさんの力によって、いかに絵から状況を豊かにイメージができるかがわかる。

他にも、まゆが土俵ぎりぎりに追い詰められる

シーンや戦いが終わって胸上げをされるシーンも降矢さんの画力によって、横向きのままで土俵際の迫力や高さを出した絵になっており、絵描きさんの構図の工夫のすばらしさを実感できる。

作家の作品世界は1冊の本には留まらない。長谷川摂子さんが文章を手がけた『おっきょちゃんとかっぱ』の絵は降矢さんが手がけている。他作品でもかっぱを描かれている降矢さん。『まゆとかっぱ』では、お皿をナルトにしたり、魚をのせたりしていて、ストーリーに出てこない遊びや子どもたちへの心配りを随所に見つけられる。『おっきょちゃんとかっぱ』に登場する草笛が『まゆとかっぱ』にも登場しているなど、作品をまたいだ絵本のたのしみかたもある。また『きよだいな きよだいな』をはじめとし、降矢さんの作品にはキツネが登場する。そのキツネの表情から『まゆとおに』の時はキツネはおにを怖がる、か弱い存在だったのに、『まゆとかっぱ』では、まゆの保護者的な立ち場で、若干あきれたり、見守ったりする存在になっているのがわかる。また、話の中でまゆとは別のところで、キツネはキツネで小さなカップとの交流をするサイドストーリーがある。

絵描きさんの絵の力は物語の世界を広げる。『おおきなかぶ』の佐藤忠良さんは、1948年までシベリアに抑留されていて、『おおきなかぶ』の舞台であるロシア人についてよく知っていたため、当時編集だった松居直さん（こどものとも初代編集長）が依頼をした。おじいさんが、おばあさんと呼び、孫を呼び…と登場する人物が増えていくが、なかなかカブは抜けない、という展開はご存じの通り。「うんとこしょ どっこいしょ」のインターバル、絵をよく見るとおじいさんとおばあさんたちはひどく疲れ、しょんぼりした様子で描かれているが、これは文章には全くない演出である。文章に書かれていない余白を描いた絵が、物語に奥行きやリアリティを与え、作品の細部までも物語っ

ている。

1980年代には、佐藤さんと安野光雅さんが、『子どもの美術』という教科書をつくっていた。教科書の中で「絵が上手になることが大切なのはなくて、自分がどういうふうに生きていくかを知るために、こういう授業があり、物を見るということが大切」と語っている。

安野さんは美術教師で、授業参観で松居直さんがスカウトした作家である。物語が書けないと言った安野さんに、「字がない絵本でもいいじゃないですか」とすすめた結果、『ふしぎなえ』が誕生した。『もりのえほん』も字がないが、じっくり見て森の中に何がいるかを楽しむ本である。安野さんはどこにどんな動物が書いてあるかは自分で見つけるものだから、答えを載せたくないと言っていたが、自分が死んでしまったら答えを知っている人がいなくなってしまうからと、現在の版には解説がつくようになった。

ほかにも、安野さんが「繰り返し、繰り返し見る本を作りたい」との思いから生まれたのが『あいうえおみせ』や『しりとり』。『あいうえおみせ』は「あいうえお……」「いろはにほへと……」という言葉に基づいてさまざまな商店街をみせる絵本。『しりとり』はページをめくりながら、ページに描かれているものでしりとりをしていく絵本。最後のページまで行って「ん」で終わらなかったら、また頭からしりとりをはじめることができる。しかし必ず「ん」で終わる時がある。「自分で答えを見つけるのが楽しいのです。考えることは生きることです」と語る安野さんは、司馬遼太郎など各分野の著名人と交流があった。「天気予報をみて、服装を考えるのも、何を食べるかも自分で考える方が楽しいし、それが生きるということ。自分で考え、判断することの中からこれは本当、これは嘘と物事を見極められるようになりたいと思う。学問とは何が本当か、何が嘘かを判断するために

ある」と語った。

安野さんと同じく、「繰り返しページをめくって何度も何度も見たくなる、そんな本が作りたい」との思いを持っていたのが、『だるまちゃんとしてんぐちゃん』の加古里子さん。シリーズ 50 周年記念で刊行された『だるまちゃんしんぶん』は、1950 年代に子ども新聞を作っていたことに由来する。細かい編集方針に基づいて作られており、世界や日本、季節、町や村のニュースの他、なぞなぞや季節の花や生き物などが掲載された、日本の子どものための新聞である。加古さんの本づくりには、加古さん自身が軍国少年であった体験から、周りに惑わされず自分で良し悪しを判断できる人間になってほしいという願いが込められている。また、だるまちゃんの相手は緻密なお相手一覧表を基にさまざまな構想があったが、沖縄戦と東日本大震災に心を痛めていた加古さんが、子どもたちのために今出しておきたいという強い思いをお持ちだったため、キジムナちゃん、はやたちちゃん、かまどんちゃんの 3 冊を最晩年の 2018 年に同時に刊行した。

『もこもこもこ』の元永定正さんは、今までになく、誰も考えつかないような面白い絵本を作りたいと常に言っていた。『ころころころ』は「ころころころと転がって終点まで続いていくが、リズムを崩さないように、道の変化、形の変化をつけながら気を配って描いているうちに、私たちの人生もこの小さな色玉のように、色々なことに出会いながらそれでも前に進んでいく逞しさが大切なのではなかろうか」と思ったという。『ありこのおつかい』や『とらたとおおゆき』の絵を描いた中川宗弥さんも抽象画を描くが、それは「世の中には美しいものがいっぱいあって、そのまま描こうと思って本物の美しさには勝てない。だから具象ではなく、抽象画を描くようになった」という。

今を生きる作家さんたちの表現で、心に響くも

のを届けることも出版社の使命の一つである。「世界は楽しく美しいものに囲まれていると知ってほしい、世界の見本帳を作りたい」との思いから誕生した本が、『いきものづくし ものづくし』シリーズ全 12 巻である。自然の生み出したもの 48 テーマと、人の生み出したもの 36 テーマ、合計 84 テーマを紹介している。絵描きさんの絵で勝負して、魅せる本にしようと、全て絵で構成されている。昆虫は生きた実物を見本にして描いたり、靴は整然と並べず、履いている時のように動きをつけて。お菓子なら原材料ごとに分けて配置するなど、より魅力的に見えるように配置されている。解説も絵を見て集中できるよう、あえて別冊の形式をとっている。

「自分で考える経験を積み重ねていくこと、本と出会って、本を介して人や過去との対話、そして自分との対話を通じて成長してほしい。本を手渡す作業は子育てと同じく、時間も気持ちも労力もかかるが、とても大切なこと。福音館の松居直がよく言っていたことですが、三方よし、という考え方があって、出版社は、読者にとってよい本であり、なおかつ世間の役に立つものであり、著者の方にとっても出版社にとってもよい本を作らなければならない。そしてなにより、子どもたちを置いてきぼりにしない本を作っていかなければならないと思う」と、寺久保氏は締めくくった。

(上村)

今回の子ども図書研究室講演会の報告は、当館職員が作成した報告を寺久保末園氏が監修、そして講演の内容や寺久保氏の思いがみなさまに伝わるようにと加筆修正して下さいました。

末筆ではございますが、この場をお借りして感謝申し上げます。

新刊児童図書巡回展示研修会

西部会場：掛川市立中央図書館 8月24日(木)

中部会場：静岡県立中央図書館 8月30日(水)

参加者：西部45名、中部49名

当館では、県内市町立図書館職員及び小中学校図書館関係職を対象に、「新刊児童図書巡回展示研修会」を実施し、当館で選定を行った資料等について、皆様にお伝えしています。ここでは、今回取り上げた本の一部をご紹介します。

【知識の本】

知識の本では、出版点数が近年増加傾向にあるお金や投資、戦争に関する資料を中心に紹介しました。

中学校・高校の家庭科で、消費者行動や経済生活を学習する際に、税金や投資について触れています。そこで、お金や経済、金融商品についてわかりやすく解説している資料を取り上げました。

- 『どうなっているの？投資のしくみ』
藤田智子／監修 汐文社
- 『キホンがわかる！税金とわたしたちの暮らし』
三木 義一／監修 ほるぷ出版
- 『僕らの未来が変わる お金と生き方の教室』
池上彰／監修 Gakken

6～8月にかけて戦争関連書籍の出版が増える傾向にあります。ロシアによるウクライナ侵攻以降、戦争に関する児童書の出版が増えていると考えます。過去に起こった戦争・紛争を知る本や、戦争体験者の経験から知る本、3人の写真家の視点から切り取った日本人・日系人の強制収容を扱った本がありました。

- 『地図でわかる世界の戦争・紛争』
小川浩之／監修 汐文社
- 『地政学から戦争と平和を考える国際情勢と領土問題』

国際地政学研究所／監修 金の星社

- 『世界でいちばん幸せな男101才、
アウシュヴィッツ生存者が語る美しい人生の
見つけ方』
エディ・ジェイク／著 河出書房新社
- 『カメラにうつらなかった真実3人の写真家が
見た日系人収容所』
エリザベス・パートリッジ／文 ローレン・タ
マキ／絵 松波佐知子／訳 徳間書店

【読み物】

読み物は、作品の主題で障がいや性の多様性に焦点をあてるのではなく、登場人物のひとりが特性を持っているという描き方が、欧米の児童書ではみられるようになってきていると考えます。

- 『わたしはスペクトラム』
リビー・スコット／著 レベッカ・ウエストコ
ット／著 梅津かおり／訳 小学館
- 『ロンドン・アイの謎』
シヴォーン・ダウド／著 越前敏弥／訳
東京創元社
- 『グッゲンハイムの謎』
シヴォーン・ダウド／原案 ロビン・ステー
ヴンス／著 越前敏弥／訳 東京創元社
- 『手で見るとぼくの世界は』
樫崎 茜／作 酒井以／装画・挿絵 くもん出版

お金や異文化理解、多様な家族のあり方、思春期の心をリアルに表現した作品もありました。

- 『起業家フェリックスは12歳』
アンドリュー・ノリス／著 千葉 茂樹／訳
あすなる書房
- 『雨にシュクラン』こまつあやこ／著 講談社
- 『ぼくらは星を見つけた』戸森しるこ／著 講談社
- 『きみの話を聞かせてくれよ』村上 雅都／作
カシワイ／絵 フレーベル館

【絵本】

絵本は、新訳・改訳や復刊・続刊の作品を中心に
取り上げ、その違いをご覧ください。

〈新訳・改訳〉

- ・『あくたれラルフのクリスマス』
ジャック・ガントス／作 ニコール・ルーベル
／絵 こみやゆう／訳 童話館出版
※旧訳も、こみやゆう PHP 研究所（2013）
- ・『コールテンくんのポケット』
ドン・フリーマン／作 木坂涼／訳 好学社
※旧訳は、さいおんじさちこ 『コーちゃんの
ポケット』ほるぷ出版（1982）
- ・『トスカのクリスマス』『トスカのおくりもの』
マシュー・スタージス／文 アン・モーティマ
ー／絵 おびか ゆうこ／訳 徳間書店
※旧訳は、木原悦子 講談社（1991）（1992）
- ・『どこどこいった？』
マーガレット・ワイス・ブラウン／原作
齋藤 楨／絵と訳 あすなろ書房
※旧訳は、バーバラ・クーニー／絵
うちだりさこ／やく『どこへいった？』
童話館出版（1996）
- ・『コーギビルの村まつり』『コーギビルのゆうか
い事件』『コーギビルのいちばん楽しい日』
ターシャ・テューダー／絵・文
食野雅子／訳 河出書房新社
※旧訳は食野雅子 メディアファクトリー
（1999）2001）（2002）と、『コーギビル
のむらまつり』渡辺茂男 富山房（1976）

〈復刊・続刊〉

- ・『あくたれラルフがっこうへいく』他
ジャック・ガントス／作 ニコール・ルーベル
／絵 こみやゆう／訳 出版ワークス
- ・『どうながの プレッツェルとこいぬたち』
マーグレット・レイ／文 H.A. レイ／絵
わたなべつた／訳 福音館書店
- ・『くまの子ウーフのたからもの』

神沢利子／作 広瀬 弦／絵 ポプラ社

- ・『えをかく』
谷川俊太郎／作 長新太／絵 講談社
※1979年刊の新装版
- ・『ほんとかな ほんとかな』
多田ヒロシ／著 こぐま社
※1979年刊の新装改訂版
- ・『おとうさん・パパ・おとうちゃん』
みやにしたつや／作絵 鈴木出版
※1996年刊の新装改訂版

今回の新刊巡回展示で取り上げた資料は、当館の
子ども図書研究室でご覧いただけます。

（一部所蔵なし）



お知らせ

「新刊サロン」

令和5年11月、令和6年2月に開催を予定し
ていた「新刊サロン」は、諸般の事情により、中
止させていただきます。

「子ども図書研究室だより」

「子ども図書研究室だより（No.107）」の発行
は令和6年10月頃を予定しています。

当館「新刊サロン」「子ども図書研究室だより」
を楽しみにしてくださっている皆さまに、大変
ご迷惑をおかけいたしますこと、心よりお詫び
申し上げます。来年度の子ども図書研究室事業
につきましては、詳細が決定次第、当館HPな
どにてお知らせいたします。

知識



『私の職場はサバンナです！
14歳の世渡り術』
太田ゆか／著
河出書房新社
2023年5月

サファリとはスワヒリ語で旅を表し、「自然の中で野生動物を観察しに行くアクティビティ」の意味で使われる。南アフリカ政府公認サファリガイドの太田ゆかさんが、ガイドの仕事内容やサファリの動物たちの生態、密猟・絶滅などの危険にさらされた状況を教えてくれる。「ライオンがよく眠るのはなぜ？」「白くないのにどうしてシロサイ？」という疑問から、動物の足跡情報の見方まで。サファリの魅力と危機的な現実を知り、動物たちと美しい自然を守るために、できることを考えるきっかけをくれる。

【小学校高学年から】（上村）

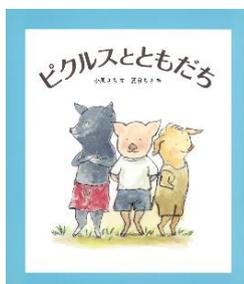
絵本



『コブシメがやってきた！』
高久至／写真・文
アリス館
2023年6月

屋久島、エダサンゴが広がる海の中。見上げるとUFOや潜水艇にも見える生き物の正体は…コブシメ！イカの仲間で大きくて体長50cmにもなる。体のふちのひれ「エンペラ」をひらひらさせて泳ぎ、「ろうと」で海水を噴き出して素早く移動する。そして周りの様子に合わせてとげとげを出し、色を変える姿はまるで海の忍者。コブシメはサンゴの近くで求愛し、敵から守ってくれるサンゴに卵を産みつける。誕生したコブシメの赤ちゃんは、小さいけれどたくましく生きていく。コブシメの生態を追った美しい写真絵本。【小学校低学年から】（上村）

読物



『ピクルスとともだち』
小風さち／文
夏目ちさ／絵
福音館書店
2023年5月

小学生のこぶたの「ピクルス」は、春休みに近くのおばあちゃんの家に移ってきた同級生「ジンプ」と友だちになる。夏休みが終わったある日、砂浜で打ち上げ花火があると知りジンプを誘う。ジンプは、おばあちゃんの足が悪く遠くまで歩けない、その日はおばあちゃんの誕生日で一緒にいたいと断る。ピクルスは、ジンプやおばあちゃんも一緒に花火が見られるように両親や友達に相談する。みんなで協力してジンプやおばあちゃん、友だち家族と一緒に誕生日と花火を楽しむ。

【小学校低学年から】（三枝）

読物



『最後の語り部』
ドナ・バーバ・ヒグエラ／著
杉田七重／訳
装画：千海博美 装幀：藤田知子
東京創元社
2023年4月

じき 13 歳になるペトラは語り部の祖母をもつ。彗星が衝突する地球から逃れるため、宇宙船に乗り込む。眠っている間に植物学、地質学、物語をインストールされたペトラは、380年後に宇宙に着く。宇宙船内では革命が起きており、ペトラ以外みな記憶を消されていた。ペトラは過去の記憶と物語の力を信じ、多様性を排除する大人たちに対抗していく。読み応えのある壮大な SF 作品で、戦争についても考えさせられる。読み物に親しんでいる中学生くらいの子どもにぜひ手渡したい。【中学生から】（山下）